

# 琉球大学学術リポジトリ

## 文末表現としての「けれども」の機能について

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学法文学部国際言語文化学科欧米系 公開日: 2007-04-20 キーワード (Ja): 言いさし, けれども, 終助詞 キーワード (En): 作成者: 金城, 克哉, Kinjo, Katsuya メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002000996">https://doi.org/10.24564/0002000996</a>

## 文末表現としての「けれども」の機能について

金城 克哉

### 0. はじめに

まず、次の会話におけるBの発話に注目してもらいたい。

A: ねえ、今度の日曜日ひま？

B: 特に予定はないけど。(SFJ3:12)<sup>1</sup>

日常会話ではこのBの発話に見られるように、逆接の接続詞とされる「(れ)ど(も)」(以下、表記を統一するため「けど、けども、けれど、けれども」を一括して「けれども」として扱う)や「が」で発言が終わる場合が少なくない。これまでこういった発話は「中断文」とか「言いさし」という名称の下で分析されてきた。これは文字通り「けれども」や「が」の後に発言が続く(であろう)にもかかわらず、発話がここで切れていると考えてのことである。そして、こういった発話は話し手の「謙虚さ」を表すとか、「やわらげの表現」として分析されてきた。この論文では、これからさらに踏み込んで「謙虚さ」や「やわらげ」の根底にあるものは何であるのかということを中心に据える。度々指摘されているように、日本語を学ぶ学生の中には場面にそぐわない「言いさし」発言をする者が少なくなく<sup>2</sup>、また学生並びに教師用文法解説書にも十分な記述がなされているとは言えず日本語教育の現場でも混乱しているという現状にある。このことに鑑み、日本語のテキストにある会話文を主に調査資料として用い、分析対象とする。日本語教師はテキストにのっとり授業を行い、テキストに現れる「言いさし」について十分に理解した上で指導にあたらなければならないからである。論述の展開は以下の通り。まず、第1章では過去の分析、特に佐藤(1993・1994)の分析を批判的に検討する。第2章では「けれども・が」による言いさしが現れるコンテキストを特定し、仮説を立てる。第3章では、こういった言いさしが現れると不適切になるような場合を想定し、仮説が正しいことを検証する。第4章では先行研究と今回の仮説の相違点・類似点についてふれ、第5章でまとめの考察を行う。

## 1. 佐藤の「言いさし」分析とその問題点

### 1.1. 「けれども・が」による「言いさし」の機能分析

「・・・けれども/が」という「言いさし」は「やわらげの表現」、「謙虚さを表す」などの主張がなされる中<sup>3</sup>、佐藤（1993・1994）はかなり詳しく機能分析を行っていて注目に値する。佐藤（1993：42）では「言いさし」を次のように定義する。

「・・・話し手にとって伝達すべき内容が明白であるにもかかわらず話し手自身によって文が中断されていて、しかもその後に来るべき内容の文言が会話の中のほかの部分に見られず、その場の状況から自明でもない場合」であり、「その内容を聞き手が性格に理解するための明示的な手がかりが、その場の言語的・非言語的文脈から得られないにもかかわらず、相手が自ら文の後半を言い残す場合」

佐藤は初級～上級学習者の習得状況を視野に入れ、日本語教育で用いられるビデオ教材を分析し、次の5つの機能を抽出している：

- (1) 暗示的情報要求のサインの送信
- (2) 明示的情報要求に伴う忌避侵犯の回避
- (3) 敬語の過剰使用の回避
- (4) ある種の言語行為の目的達成の方略としての明示的要求の回避
- (5) 討論での turn 譲渡における turn-taking 強制の回避

次にこの分析の問題点について考える。

### 1.2. 佐藤（1993・1994）の問題点

#### 1.2.1. 「けれども」の含意

第1の問題点として「けれども」の含意を如何に特定するかという問題がある。佐藤は先にも触れたように「日本語教育映像教材中級編」を分析し、例えば次の発話について

- (1) この表がないんですけれど

「けれども」の前の部分を「情報提供」、「けれども/が」の含意を「情報求め」もしくは「情報要求」であるとする。しかし、この「含意」がどのように導き

出されたのか、グライスの言うような会話の含意であるのか否かが明らかではない。佐藤は(1)の場合、「けれども」の後に続く部分が「どこにあるか教えていただけますか」等といった発話になると想定し、「けれども/が」には「情報要求」の含意があると主張していると考えられる。この他にも、含意として「意向伺い」や「了承求め」「意見求め」等が挙げられている。しかし、先の佐藤自身の定義に従えば、この言い残した後半部分は「その内容を聞き手が正確に理解するための明示的な手がかりが、その場の言語的・非言語的文脈から得られない」のであるから、この省略部分を根拠として「けれども」自体にこのような含意があるということではできないはずである。また、省略部分を根拠とせず佐藤がここでいう「含意」を導き出したとすれば、何に基づいてそれらが導き出されたのか明らかでなく、議論として成り立たないであろう。

### 1.2.2. 忌避侵犯の回避について

第2の問題点は忌避侵犯の回避についてである。佐藤は「けれども」の第一義的な機能を暗示的信息要求であるとした上で、「けれども」が使用される理由として、相手のプライバシーを侵害するのを避けることを挙げる。即ち、「情報要求を目的とする言語行動には、相手を難詰する語調になったり、相手のプライバシーを侵したりして無遠慮な印象を与える危険性が伴う」ために、「言いさし」が用いられると主張する。しかし、佐藤自身(1994:24)「ある種の情報要求には相手を不快にさせる要素」が含まれると認めている。佐藤の例を引く。

(2) A: 函館のどのあたりに住んでました？

B: 言ってもわからないと思いますけど。

このBの発話には冷たい響きがある。つまり、「けれども」を使ったからといって常に相手のプライバシーを侵害するのを避けたり、相手に丁寧に接することにはならないし、無遠慮でなくなるわけでもないのである。「けれども」による「言いさし」が用いられるには「難詰する語調を避ける」働きをするためでもあるし、逆に「(敢えて) 難詰する語調にする」場合の、相反する2つの場合があるという矛盾した分析が導き出されてしまう。

### 1. 2. 3. 敬語回避

佐藤(1993)は第3の機能に「敬語回避」をあげ、「単に敬語使用の煩雑さから逃れるというだけでなく、敬語を完璧に使いすぎることからくる相手との心理的距離の拡大を避けるためにも、敬語回避の方略として言いさしの形をとることは有効である」とする。しかし、敬語の使用によって必ずしも相手との心理的距離が拡大するとは限らない。むしろ「心理的距離を保つ」ために敬語が使われる場面もあるはずである。また、言いさしで終わらずに、完全に言い切ってしまう場合でも「けれども/が」の後に続く発話で必ずしも敬語が使われるわけではないし、その場合には敬語を回避するために「けれども」による言いさしが用いられるという議論は成り立たない。

以上、佐藤の分析の3つの問題点を取り上げた。しかしながら、以下の議論は佐藤の分析を全面的に否定するものではない。特に第4と5の機能として分析された「相手の反応を見る」「turn 交替の可能性を仄めかす」という分析を支持する。

## 2. 機能の再分析

### 2.1. 文末の「けれども/が」の扱い

佐藤は「けれども」や「が」で終わる発話を中断文と捉え、一貫して「言いさし」という用語を用いている。これとは逆にこれら接続詞を終助詞化したものと見なす立場がある。以下の議論では「けれども」や「が」で終わる発話を一つの完結した発話と考え、「けれども」や「が」を接続詞が終助詞化したものとし、「中断文」や「言いさし」といった表現を用いない。これは、佐藤自身も指摘しているように「省略」があるとしても、それに伴う後半部分の復元が言語的・非言語的文脈から得られない場合が多いからである。「省略」という現象は、「けれども」や「が」の後の節全体が省略されているという場合と、例えば明らかに格助詞が省略されている場合(「コーヒー飲みますか?」)とでは次元の異なる事柄である。ここで一概に「省略」といつてかたづけられるとは思われない。「省略」という現象が「復元可能性」と密接に結びついていることを考えれば、尚更「省略」という述語の用法に気をつけなければならない

と思われる。そして何よりも「けれども」や「が」が逆接の接続詞と分類されていることのみを根拠として「後半部分が省略されている」とは言いえないはずである。実際、以下の議論で明らかになるように、もはやこれらは「逆接」の意味を持ちえず、話者の心理的態度を表すために用いられているのである。その性格からすれば、「わ」「よ」「さ」といった終助詞により近いものであると結論づけられなければならない。

## 2.2. 「Sけれども」の現れ方

会話形式が多く現れるという理由でここでは Situational Functional Japanese という日本語教科書のドリル練習、第2と第3分冊の中で「Sけれども/が」の出現頻度を調査した。結果、81例が確認された。この中で「Sけれども/が」の前後のコンテキストを観察し、一定のパターンがあることがわかった。それは質問に対する答えとして現れるという傾向である。以下の例を観察してもらいたい。

(3) A: どうも申し訳ありません。

B: どうしたんですか。(=質問)

→ A: これ、こわしたんですけど・・・(=答え)

B: ああ、気にしなくていいですから。

A: ほんとうに申し訳ありません。(SFJ3:113)

実際の数字で言うと、話題を切り出す際に用いられる場合が37例。それ以外が44例である。この44例中、「Sけれども/が」が質問に対する答えとして現れるケースは29例あり、これは話題を切り出すために用いられるものを除けば約66%に当たる(念のために付け加えておくと、44例中「Sけれども/が」で会話が始まっていて、それ以前の相手の発話が特定できないケースが5つあり、これを除くとおよそ74%になる)。

### 2.3. 上記パターンに当てはまらないケース<sup>4</sup>

「Sけれども/が」が現れるコンテキストとして質問に対する答えというパターンがあることがわかったが、それ以外のケースが存在することも見逃せない。では、この「答え」に現れる傾向とそれ以外の場合には何らかの共通点が見出せないものだろうか。次の例を観察しよう。

(4) A：あのう、お願いします。

B：はい、どうなさいましたか。

A：ちょっと、頭が痛いんです。

B：そうですか。ええと、初診の方ですか。

A：はい

B：じゃ、ここの用紙に記入してください。

→ A：あのう、まだ日本語がよくわからないんですが。

B：そうですか。じゃ、私が質問しますから。(SFJ2:14)

(5) A：あの、これお願いします。[本を見せる]

→ B：あ、これは貸し出しできないんですけど。

A：あ、そうですか。あの、コピーはできますか。(SFJ2:153)

(4)では病院の初診者受付の会話、(5)では図書館の貸し出しカウンターでのやりとりが想定されている。これらの場合、相手側から何らかの要求（用紙への記入、貸し出しの手続きをする）に対して、相手の要求にうまくそうすることができないことを述べる場合に「Sけれども/が」が用いられている。これは質問に対する答えとして現れる「Sけれども/が」と関連付けられないであろうか。

### 2.4. 仮説

質問をする側（A）は相手が自分の質問に答えられるだけの十分な情報を持っていると仮定していて、その情報を与えてもらうよう要求する。答える側（B）は要求されている情報を与えるように努める。次の電話でのやりとりを見てみよう。

(6) A : あの、〇〇さんいらっしゃいますか。

→ B : すみません。まだ帰ってきてないんですけど。

A : そうですか。じゃ、すみませんが、伝言お願いできますか。

(SFJ3:41)

Bは問題の人物がまだ帰ってきておらず、家にいないという情報を伝えている。答えとしては相手から要求されている情報を与えているという点で、申し分ない。そこに「けれども」が加わっているのは、2.3.の別のパターンで見たように、「相手の要求にうまくそうとすることができない」という意識を表したいからなのではないだろうか。

「相手の要求にうまくそうとすることができない」というのは、さらに言えば、「相手に迷惑をかけることになるおそれがある」ということである。先に見た(3)の場合、「これ、こわしたんですけど・・・」と言う事によって、話し手は「聞き手の物を壊した」という情報を伝えるという作業に加えて、そのことで相手に迷惑をかけることを気にかけられていると考えれば何故「けれども」を用いているのか説明がつく。以上の考察を基に次のような仮説をたてる。

仮説：話題を提供する場合の「Sけれども/が」を除き、いわゆる「言いさし」の「Sけれども/が」は「自分が提供する情報が相手にとって不十分なのではないか」、そして「情報は十分かもしれないが、その情報を要求するもとなつた相手の意図並びに期待にそえないものなのではないか」という話し手の意識がある場合に用いられる。

ここで話題を提供する場合の「Sけれども/が」を除くとしたのは、例えば誰かの部屋をノックして「俺だけど」とか「山田ですが」というような場合にも「Sけれども/が」が現れるのであるが、それは今回の考察の対象からは除外するということである。いわゆる「言いさし」の「Sけれども/が」の全体像をつかむにはこういった「話題を提供する」とされる事例まで含めた考察が不可欠ではあるが、それは次の機会に譲りたい。以下、上記の仮説の検証に移る。

### 3. 仮説の検証

#### 3.1. 「Sけれども/が」の現れないコンテクスト

「Sけれども/が」が現れるとコンテクスト上不適切になる発言を通して、仮説が正しいことを見ていくことにする。まず、先にとりあげた電話でのやりとり(6)をとりあげる。この会話の続きとして次のようなやりとりがある。

(7) A：いつごろお帰りになりますか。

→ B：もうすぐ帰ると思いますけど。

A：じゃ、すみませんが、お帰りになりましたら、お電話くださいとお伝えください。

→ B：はい、わかりました(\*けれども)。

A：じゃ、よろしく願います。(SFJ3:39)

2回目のBの発言、「はい、わかりました」は、相手の伝言を確実に問題の人物に伝えるという約束である。しかし、この発言が「けれども」で終わってしまうと、何か奇異な感じがするのは否めない。何故か。これまでの分析のように、ただ単に「いいわけ、事情の説明などをやわらかい調子で述べる」(「日本語文型辞典」1998:109)といった説明では解決できないのは明らかである。Bがこのやりとりの中で一貫して「やわらかい調子で」何事かを言おうとしているのであれば、第1の発言(「もうすぐ帰ると思いますけど」)に引き続き、「はい、わかりましたけれども」も「やわらかい調子」の発話としてこの場面で適切な発話になるはずである。この場合、相手の希望にそうように(最大限)努力するというを相手に伝えなければならない。しかし、Bが「はい、わかりましたけれども」と言ってしまうと、Bは伝言を伝えるかどうか確約できないと相手に伝えることになってしまう。「相手の期待にそえないものであるかもしれない」という心情を表す「けれども」は、簡単な伝言を伝えると確約する場面では不適切になってしまう。

次のようなエレベーターの乗務員と客のやりとりはどうであろうか。

(8) A : ご来店くださりまして、ありがとうございます。上へまいります。  
ご利用階数をお知らせください。

B : ～階お願いします。

A : ～階、かしこまりました。おあと、ございませんか。

→ お待たせいたしました。〇〇の売り場、～階でございます  
(\*けれども)。 (SFJ2:36)

客に要請された階に到着したということは事実としてアナウンスするが、ここではいわゆる「言い切り」の形でなければならない。「～階でございますけれども」とアナウンスしてしまうと、Aは「お客様の指定された階については確実である」ということと、「その階についたということが、(客が自ら指定したにもかかわらず) 希望に添えないことである」ということの2つの事柄を同時に表明することになってしまう。もし、この発話が適切なものになりうる とすれば、例えば「指定した階に到着はしたけれど、ここに相手 (=客) が希望しているものは売っていない」というようなニュアンスを伝える場合などがある。この例も何故「Sけれども」を用いてはおかしいか、ということが仮説によって説明される。

自分の感謝の気持ちを伝えたり、謝罪の言葉を述べるような場合は、(儀礼的にせよ) 自分の素直な気持ちを伝えるという意味で、相手の期待にそえるかどうかということとは関係しない。ならば、そういった場面では「Sけれども/が」用いられると不適切な発言になるはずであり、実際以下の例が示すように場面にそぐわない発言となる。例を2つあげる。

(9) A : そうですか。じゃ、10時頃、またお電話してもよろしいでしょうか。

B : ええ、どうぞ。

→ A : どうも失礼いたしました (\*けれども)。

B : いいえ。 (SFJ3:37)

(10) A : 遅くなってすみません (\*けれども)。

B : いいえ。 (SFJ2:104)

(10)の場合、約束の時間に遅れてやってきた学生が先生に謝るという設定であるが、Aは謝罪をする際に「遅くなってすみませんけれども」とはいえない。

何かの依頼をする「前置き」としてなら、「すみませんけれども」ということはできるだろう。

### 3.2. 「Sけれども/が」が詰問として用いられる場合

次に、先に触れた佐藤（1994）の言う「冷たい響き」のする「Sけれども/が」の用法を見てみよう。佐藤の例を引く：

(1) A：いくつだったっけ、年。

B：32だけど。

佐藤は、「Sけれども/が」が尻上がりの語調で発話される場合、情報要求の内容が相手の感情を害するようなものであることと連動して失礼な言い方になると説明する。確かに、尻上がりの語調で「Sけれども/が」が発話されると「挑発的」とか「問いただす」ような響きがあるが、これは佐藤の説明するように「情報要求の内容」に問題があるためではないと思われる。仮設で述べたように、典型的に用いられる質問の答えとしての「Sけれども/が」は相手の質問の動機にまで踏み込んだ（それを氣遣う）表現であった。ここで尻上がりの語調を質問の際の音調の1パターンであると考えれば、(1)の場合で言うと、BはAの質問に対して質問で返しているということになる。さらに重要なのはBの質問というのは相手の質問の動機を問いただす問いかけになっているということである。佐藤が「挑発的」とか「問いただす」と指摘しているのはこのように相手の質問の動機にまで踏み込んでいるからなのである。Bの提供する情報はAの質問の動機を満足させるものではないかもしれない、しかしながら、一体何故そんなことを尋ねるのかと問いかけ、逆に「そんなことを聞いてどうするつもりだ」というBの姿勢を暗示することになる。「やわらげ」として分析されてきた「Sけれども/が」のパターンが逆に「挑発的」になるのは仮説で述べたように、「けれども/が」がもはや逆接の接続詞としてではなく相手の質問の動機にまで配慮するような表現であることから説明可能になる。

#### 4. 先行研究との比較

次に、提出された仮説とこれまでの先行研究などで述べられたこととのつながりを考える。佐藤も指摘しているように、先行研究では「Sけれども/が」が「遠慮」を表すとか、「やわらげ」の表現として捉えられる傾向があった。ここで提出された仮説はこれらの説に異論を唱えるものではない。例えば、水谷（1985：199）で述べられている「遠慮」ということは「相手への配慮」と捉え直すことが可能である。「やわらげ」の機能を持つと感じられる背景には、「相手（＝聞き手）に対する配慮」が働いている。

佐藤の指摘する「相手の反応を見る」という機能も、情報を提供するにもかかわらず、それが相手の希望に添うものであるかどうか分からないから「Sけれども/が」用いられるとするここでの仮説と表裏の関係になっている。同じく、佐藤では「会話の順番を引き渡す手段」という機能が抽出されているが、「Sけれども/が」は「期待・希望に添えないかもしれない」という発言に促されて何らかの反応を期待されている聞き手にとって順番を引き継ぎきっかけとなるものであり、「Sけれども/が」の第1義的な機能ではなく、派生的な機能であると考えられる。<sup>5</sup>

#### 5. まとめ

この小論では、主に佐藤（1993・1994）で取り上げられた「Sけれども/が」の機能を再考し、その上で用例を通して新たに仮説を提出、それを検証してきた。佐藤の「含意」の抽出方法、並びに「禁忌回避」や「敬語の過剰使用」といった機能の問題点を指摘した。さらに、佐藤の立場とは逆に「Sけれども/が」を「言いさし」とは捉えずに、これまで逆接の接続詞として扱われてきた「けれども/が」が終助詞化したものであると考え、終助詞としての機能を再分析した。日本語のテキストという限られた資料ではあったが、そこに「Sけれども/が」が現れるパターンを見つけ、他のデータを考慮した結果この文末表現としての「けれども/が」は「相手に対して情報提供が十分ではなく、そのために相手に迷惑をかけるおそれがあるかもしれない、相手の質問の動機を満足させるものではないかもしれない」という話し手の意識を表すものである

という仮説がたてられた。仮説の検証には「Sけれども/が」が現れにくい（もしくは発言が不適切になる）コンテクストを用いた。

今後の課題として、「Sけれども/が」の全体像をとらえるためには、仮説では扱えなかった「前置き」の用法を考慮に入れ、仮説を修正していく必要がある。また、「S1けれども/がS2」という本来の逆接の機能との関連性も調査しなければならない。さらに日本語教育の中で、会話に頻繁に現れる「言いさし」をどのように扱うのかも今後の研究課題となる。

#### 注

- 1 Situational Functional Japanese, vol. 3, p. 12 を指す。以下同様。
- 2 「けれども」や「が」ばかりでなく、他の接続表現による「言いさし」の非用と談話の展開の仕方については水谷（1993）を参照のこと。
- 3 先行研究のまとめについては佐藤（1993・1994）を参照のこと。ここではいくつか代表的な主張を引用するにとどめる。

森田良行「基礎日本語2」（1980：136）

「やるだけのことはやってみますが（できるかどうかわかりません）」の後半部分を略すことによって、『合えない、責任がもてない、自信がない、心ならずも、意思や希望に反して、本心はそれとは反対なのだが、やむを得ず、不満足ながら』等の気持ちを表す。はっきりと断言できない裏には・・・微妙な心理が潜んでいるのである。」

水谷・水谷「外国人の疑問に答える日本語ノート1」（1988：21）

「言わずに済ませる部分は、通常、相手の希望をたずねる部分である。たとえば、『はい、おりますけど』のあとには『呼びましょうか』が省かれ、『わたしですが』のあとには『何かご用でしょうか』が略されている。この用法における『が』や『けど』は、ためらいがちで、ゆれを伴った口調で、決定的な印象を与えないように発音される。『けど』や『が』は、要するに、遠慮なく要求を述べるよう、相手を促す役割を果

たしているのである。」

グループ・ジャマシイ編著「日本語文型辞典」(1998:109)

「文を途中で省略した形で、いいわけ、事情の説明などを柔らかい調子で述べるのに用いる。・・・間接的に依頼をするのにも使う。丁寧体、普通体どちらの文にも付く。丁寧体に付くと女性的で丁寧な表現になる。話し言葉。」

- 4 今回の調査では話題の提示として用いられるケースが37あったが、以下の議論（及び仮説）ではこれらの事例は取り扱わない。
- 5 ここでは日本語の教科書をデータとして扱っているが、実際の会話の場面でも「Sけれども/が」の後に会話の順番が交替する事例がかなりある。次のデータを参照のこと。

(i) カウンセラー：ななめに抱いて

母親：はい

カウンセラー：片方の手で

母親：はい

カウンセラー：そういう抱き方？

母親：あ えっといろいろ抱いたりしてるんですけどー

カウンセラー：例えば？

#### 参考文献

グループ・ジャマシイ（編）1998 日本語文型辞典 くろしお出版

佐藤勢紀子 1993 言いさし「・・・が/けど」の機能：ビデオ教材の分析を通じて、東北大学留学生センター紀要，1，39-48.

佐藤勢紀子 1994 中上級日本語教育における中断文「・・・が/けど」の扱い方，東北大学留学生センター紀要，2，17-25.

筑波ランゲージグループ 1992 Situational Functional Japanese, Vol.2 & 3

水谷信子 1985 日英比較話しことばの文法 くろしお出版

水谷修・水谷信子 1988 外国人の疑問に答える日本語ノート

The Japan Times

森田良行 1980 基礎日本語2 角川書店

## On the sentence final expressions keredomo/ga

This paper deals with a sentence pattern “S keredomo/ga”. Reviewing Sato’s (1993,1994) papers, in which five functions of “keredomo/ga” are proposed, it will be pointed out that some problems still remain in her analysis. Based on the observation that “S keredomo/ga” tend to occur as an answer for a question, a hypothesis will be presented: when the speaker uses “S keredomo/ga, s/he is afraid that s/he is not providing enough information which satisfies the motivation of the inquiry. It will be suggested that some data, which cannot be explained by former analyses, are explained with this hypothesis.